

自閉的な子ども (075~078)

座長 蔭山英順・小寺鉄也

- 075 幼児自閉症の言語と象徴機能 その(1)
 東京大学 ○仙田周作
 " 清水康夫
 " 太田昌孝
 " 栗田 広
 " 畑中 邦比古
 全国心身障害児福祉財団
 療育相談センター 小 熊 順 子
 " 谷 口 博 子
- 076 自閉症児の精神発達構造に関する心理学的研究
 (その1)
 大阪府立松心園 小 寺 鉄 也
- 077 同胞自閉児の社会化過程に関する事例研究
 お茶の水女子大学 小 泉 左江子
- 078 自閉的聴覚障害児のコミュニケーション発達
 名古屋大学 蔭 山 英 順

各発表後の質疑応答

小泉(077)に対して清水(東大)より、①同胞自閉症児の母親に対する具体的な面接方法を教えて欲しい。②卵性に関しては不明とあるが、指紋等の検査の有無。③他の医学的検査(EEG, CTスキャン等)は実施されなかったのか?の質問があり、小泉は①に対して、主に母親の記憶に基づいて行った。②に対して、今から考えればそのような検査の必要性を感じるが今回のケースでは頭髪鑑定のみであった。③に関しては、私達の研究所の方針は必要以外の検査はできるだけ避けるという方針である為、今回は実施しなかった。と答えた。同じく小泉に対して堀田(田中教育研究所)から、文期に入園した症例W, I, Yと単語期に入園したM, Hとの入園時の年齢に差はあったか否かの質問があり、小泉はほぼ同じであり開いても1年程度と記憶しているとの回答であった。蔭山(078)に対して作間(ヒヤリングセンター)より、自閉的でしかも聴覚障害がある場合、インストラクションを理解することがかなり困難と予想されるので今回の対象児への知能検査をいかに行ったのか詳しい状況を知りたいとの質問があり、蔭山は、知能検査は小5の時に行った。それ以前の小4の10月より遊戯療法的接近によりかなりコミュニケーションできる状態となり、小5の9月より手話を導入し家庭においても治療場面においてもかなりコミュニケーションできるようになった段階にお

いて実施した。検査時には母親に同席してもらい、インストラクションを補助してもらいながら実施した。聴力検査はほぼ同じ時期において学校適応が急激に改善されたので言語訓練を担当している養護学校の専門家によって測定されたと答えた。

質疑・討論

仙田(075)に対し小寺(大阪府立松心園)より指さしの用い方に関して、叙述的指さしと命令的指さしに分けて検討しているが、そのように分けた意味についての質問があり、仙田は、指さしの用い方については感覚運動期から表象的思考期への移行に際し、正常児は指さしの多様な使い方とほぼ同時に諸々のシンボリック表示活動がでてくる。ところが自閉症の場合、そうした移行期に何か障害があると指摘されている。今回の研究はその移行期の周辺における指さしや象徴機能に着目したものである。この2つの分け方は、ベイツ(1975)がその用い方としてProto ImperativeとProto Declarativeとに分けている。それらはPiagetのいう感覚運動期第V期に出現するとしており、こうした研究を参考にしたと答えた。仙田に対して作間(ヒヤリングセンター)は、対象児はどの程度の期間フォローアップされているのかと質問し、仙田は、対象となった子供は東大病院精神科小児部に通院している子供と全国心身障害児福祉財団で診察した子供のうち自閉症と診断された40例である。方法は母親への面接で質問をした。対象児は長い子供では2年間の治療教育を行っている子供もいると答えた。仙田に朴(仙台大学)より、グループ接近法の基本的指針についての質問があり、仙田は、自閉症治療の中で例えば心理運動治療を1つの方法として使っているが、その中でも運動的課題をとりくむ中で対人関係の改善もみられている。対人と物理的環境は切り離しては考えていないと答えた。仙田に対し蔭山(名古屋大学)より象徴機能の成立の1つの契機にポインティングをあげているが象徴機能を持たせるためにポインティングをトレーニングするというようなことにもなりかねない。治療教育に関しての考えを聞きたいとの質問があり、仙田は、自閉症の治療教育をする場合、どこに着目するかが問題である。我々の研究ではそれは運動領域というよりもやはり象徴機能の形成という点に着目する必要がある。象徴機能でもその発達の段階においてレベルがあることはよく知られている。従ってそのレベルがどこにあるかを十分に調べる必要がある。言葉もなくポインティングをもたない子供にいきなり単語を教えるより、むしろやはり自分とま

わりの環境との関係やボディ、イメージ、目的と手段の分化などが重点となると答えた。仙田に対して朴（仙台大学）より、医師としての立場からの対象児に対する診断分類に関する質問があり、清水（075）は、正規対照としたものは発達的にみて正常範囲内にある子供で脳障害の既往がなく神経系の疾患の家族負因がない場合を選んだと答えた。

小寺（076）に対して堀田（田中教育研究所）より、複数の意味という内容に関してもう少し詳しく説明をして欲しいとの質問があり、小寺は複数の意味とは仙田らの研究における象徴機能とも関連してくるが私の実存への複数性とは象徴機能以前の段階においても想定できると考えている概念である。例えば乳児期における乳児の対象となる乳房は乳房そのものとは違う何らかの表象、意味を持っており、それ故複数の意味を有していると考えたと答えた。小寺に対し小熊（全国心身療養センター）は自閉症の中核症状を精神発達段階の中で位置づけるといふことに関して精神発達段階とはどのようなものを想定されているのか？との質問があり、小寺は複数の意味は発展・変容を経てゆき、より高次の意味づけを実存に与えてゆくがそれにより自閉症の中核症状を説明してゆきたく研究（その2）以降にアプローチしてゆきたいと答えた。小寺に対して堀田（田中教育研究所）より、自閉的な子供が母親をふだんは見ないがちらっと視線を合わせるといふ時、それはその子供が複数の意味でもって母親を見ているということになるのか？との質問があり、小寺は対人認知に関しては事物を対象として把握してゆく次元とは違った対偶性の次元もあわせて把えてゆかねばならないと考える。子供が母親をみる場合、視覚的な意味でみているという次元ともう1つ対偶性のレベルでの了解がその前提となると考えている。故に、どの次元で捉えているかという点が重要となると考えると答えた。

小泉（077）に対して清水（東大）より、自閉症児の社会化過程について細分化した段階を想定している子が段階によって母親の自閉症児へのかかわり方や母親へのカウンセリングなどにおけるポイントの置き方がどのようにかわってくるのか？またある段階ではむしろ社会化の促進には逆効果な働きかけとか母親指導というものも考えられるか？との質問があった。小泉は、当然のことに社会化過程の段階各々に治療ないし働きかけが異なってくると思われる。例えば特定の人との密なかかわりを奨励することが発達を促す場合（Part object および Whole

object の一段階）と集団に入ることが発達を促す場合（特定の大人以外にも関心が広がってきた時）とがあることが症例M, Wのケースでも他のケースでもみられたと答えた。

蔭山（078）に対して作間（ヒヤリングセンター）より、小学校第5・6年頃の情緒の変化（しくしく泣く等）の激しい時期に子供の状態も著しく改善してきていると考えられるが、そのような契機となったものは？との質問があり、蔭山は、小4より母親および本児に対して心理治療及びカウンセリングを行っているが治療開始時においては母子の共生状態にあり、そこでの交流を間接的なものにしてゆくために手話を導入し本児の内的世界が伝達するのに多くの手段が持ちうるようになったこと、さらに遊戯療法的接近によって母親以外の治療者との深い関係ができ、治療を受けるためには（治療者と遊ぶために来所すること）我慢できるようになったとともに情緒的交流を持ちうる対象が分化したこと。第3にそれ以前に全く家族の他のメンバーに対しては無関心であったものが家族が手話という彼と交流できる道具を持ったために交流が可能となり、家族内適応が急激に改善された点の重要なポイントと考えていると答えた。同じく作間より、サイン学習以前の家族の本児への接し方に関しての質問があり、蔭山は、母親以外には全く無関心な本児であったのでほとんど母親の献身的な努力によって進歩してきている。しかし、その交流は一方通行であり、彼の要求を伝達してくるのみの状態であり、母親は彼の行動の予測には大変な苦勞をしていた。特にパニック、自傷行為、家族の他のメンバーの攻撃という点について。と答えた。

今後の課題

自閉症といったきわめて難しい子ども達へのアプローチに研究者は様々な角度からの発表・検討がなされた。特に最近の自閉症児の原因論として認知言語発達障害説が登場するようになって、自閉症児の言語発達の遅れ、象徴機能の遅れなどが病因論的にも重視されるようになって、言語治療的、感覚統合的接近も注目されてきている。今回の討論では、子どもの全体発達の中での言語、象徴機能などの重要性は多くの同意が得られたが、各々の研究者の中で子どもの発達段階を考える時に発達段階が何を対象にしたものかという点に関して、また自閉症児への治療的接近法にはまだかなりの概念的および方法論的な差異がみられ今後の課題となろう。

（蔭山英順・小寺鉄也）